10　大村藩・古田山と長与俊達、大浦嘯山

長与健夫

長崎は朝鮮半島や中国大陸と近く、鎖国の時代にあっても異国人との交流は他所よりも多く、そのためか痘瘡（天然痘、一名モカサ）に見舞れる機会が多く、この病気を怖れる気風は何処よりも強かった。従って大村藩もこの病気に対しては極めて神経質で、医師たちも現状を何とか改善しようという義務感、責任感が強かったが、なす術もない状態が数百年続いた。

大村藩の侍医であった長与俊民らは、中国から斉らされた李仁山の「医宗金鑑」中の種痘篇「種痘心法」をはじめ、その他の痘瘡に関する書を読んで、そこに予防法として書かれている一、衣苗法、二、漿苗法（膿漿）、三、水苗法（痂末液）、四、旱（乾）鼻法（痘痂末）（後三者はいずれも鼻孔よりの吸入）のいずれかを児童に試み、中でも筑前秋月藩の藩医緒方春朔は藩に痘瘡が流行した時、幼児に乾鼻苗法を行って（寛政元年、一七八九）痘瘡の予防に成功した（ジェンナーの牛痘接種法の成功に先立つこと七年）。この報を聞いて幕府は彼を江戸に呼び寄せ多くの児童に試みて成功を収めたが不幸にしてその中の一人が発症、死亡するという事件がおきたため、その後彼の方法は幕府によって厳禁され、人痘接種法は頓挫を来してしまった。

俊民の後を継いだ俊達は、患者を隔離し、また予防接種をするために町から数里はなれた山里の古田山に場所を求め、そこで診療と共に予防のための接種研究を開始した。彼は乾燥させた膿漿や痘痂を粉末にして吸入させる方法は痘毒が肺に直達し危険を伴うとの考えから、腕皮を小切開しそこに痘膿を擦り込む方法（腕種法）を開発して好成績を挙げたが、それでも尚人痘を使うために痘毒が強いと健康児を発症させる危険は避けられず、折りから輸入蘭書や通詞から聞き知った牛痘による種痘法が危険なく予防を行い得ることを聞き知ってこの方法に切り換えるべく、古田山で牛を買ってそれに人痘を植え付

ける試みを幾度か行ったがすべて失敗に終わった（一種の異種移植であるので現代の知識からして成功する筈はない）。

嘉永元年（一八四八）に交代要員として長崎の商館に来た蘭医モーニッケもバタヴィアから牛痘種を持参し、それを数人の児童の腕に植え付けたがいずれも不成功に終った。佐賀藩の藩医で藩の任務上長崎に常駐していた楢林宗建は、接種不成功の理由は熱い期間の長期に亘る航海のために膿汁中の痘毒が効力を失うからではないかと考え、痘膿の代りに熱に強い痘痂を持って来て貰うよう彼に頼み込み、約束通り翌年痘痂が持ち来らされ、それを粉末にして児童の腕に接種したところ美事に善感発痘した。

俊達も旧知の通詞西善三郎から情報を得て、孫専斎他数人の児童を長崎に差し向け腕種を受けさせたところ宗建の場合と同様すべて善感発痘したので、早速その子らを大村に呼び戻し、以後古田山で牛痘の植え継ぎを行った。

宗建と俊達の牛痘接種成功の日時はどちらが早かったのか佐賀藩と大村藩の主張に多少の喰い違いはあるが、僅かの時間差であったことは記録によっても明らかである。多年の念願がかなって俊達が痘瘡の予防接種に成功したのは既に老境に入ってからのことであり（俊達は安政二年一八五五死去）、この頃孫の専斎は大阪の適塾で勉学中で、古田山の経営を含めて俊達の種痘に関する仕事を受け継いだのは、かつて専斎よりも早く適塾に入ったが医学よりも文学に凝って俊達を困らせた甥の大浦嘯山であった。彼がこの困難な仕事を受け継がなかったら、俊達の古田山における功績も尻切れトンボのような形になったかもしれない。

一九八〇年、ＷＨＯによって痘瘡の絶滅が声高らかに宣言された。多くの伝染病のうち何故痘瘡だけが絶滅されたかについては近代医学の進歩によって明らかに説明し得るが、未だエイズをはじめ数多くのウィルス性疾患が撲滅されないばかりか人類の生活を脅かしている。痘瘡は過去の疾患となったが、それの残した教訓は免疫をはじめ現代の医学の大きな課題となっている。

（愛知県がんセンター名誉総長）